

水戸黄門
目次

◎ 光圀卿幼事の御性格	1
◎ 光圀卿西山村へ御隠居	8
◎ 老臣中山備前守光圀卿へ御諫言	17
◎ 鮫川渡船場に御用飛脚取捨がる	23
◎ 農家の老嫗に火吹竹にて頭を打たる	33
◎ 駒ヶ峰の関所に於て関守役人嘲弄せらる	41
◎ 悪漢藤蔵を御戒め成さる	52
◎ 仙台青葉山城へ御登城	63
◎ 日本三景の一松島御遊覧	74
◎ 矢の根八幡宮へ御参詣	84
◎ 塀の越村音右衛門の御斬捨て	95
◎ 貞婦およねを助けらる	106
◎ 南部役人に召捕らる	117
◎ 領主南部遠江守の荒胆を挫ぐ	127

◎ 光圀卿東海道関西御漫遊	136
◎ 淀屋辰五郎を御助け成さる	148
◎ 火事場にて娘を助けらる	160
◎ 光圀卿熊沢了介と共に吉原大籠へ登楼	168
◎ 光圀卿秋雨に助太刀為らる	177
立川文庫について	191
解説 加来耕三	193

◎光圀卿幼事の御性格

今回茲に説き出す講談は、天下に名高き水戸黄門光圀卿、諸国御漫遊の事歴を申上げる事に致します。左れば黄門光圀卿が、常々御自分の身の守りにせられたる壁書に「苦は樂の種、樂しみは苦しみの種と知るべし、主人と親は無理なるものと思え、下人は足らぬものと知る可し、恩を忘るゝ事勿れ、子程に親を思え、子無き者は身に比べ近き手本とすべし、掟に恐怖よ、火に恐怖よ、酒と色とは敵と知るべし、朝寝すべからず、分別は堪忍なり、小なる事は分別せよ、大なる事に驚くべからず、九分に足らば宜し、十分は零るゝと知る可し」と有ります。始終に此御心得がございましたので今に至る迄、三才の童子も黄門様くと申上げて、敬い奉るのでございます。偕此水戸黄門光圀卿は、常陸国茨城郡水戸の御領主、御高三十五万石、時の天下の副將軍、水戸中納言頼房卿の御子孫にして、元和九年三月十五日に御誕生遊ばし、御幼名を鶴千代丸様と申上げ奉ります。此徳川御三家の内、尾張家の御相統遊ばす若君の御名を、亀千代丸様と申上げます。紀伊家御相統の

若君を、菊千代丸様と申上げます。水戸家御相続の若君を鶴千代丸様と申上げ奉るのでございませう。左れば御幼君鶴千代丸様御誕生遊ばせられると、直に御乳人を撰み、御乳を差上げます。丁度お五才の時御乳離れに成ると、是れより御側御女の中より、利発なものを御撰み出しに成り、此者を若君鶴千代丸様の御側御傳役に仰せ付けられる。然るに若君は至つての御悪戯で在らせられる。時折々御女中部家へ御遊びに御出で成さると、御腰元衆が御上の御目を忍んで、居眠りなぞをして居るを御覧遊ばし、紙を千切つて観世捻りを拵らえ、其れを鼻の穴へ差し込んだり、又は顔に墨を塗つたりして、悪戯を成さるので、御女中方は誠に困つて居られます。其内に早や若君は、御七才に御成り遊ばした、其年の十二月、小石川御上館の雪見の御殿にて、鶴千代丸様は雪の降るのを御厭い無く、御椽の障子を明け広げさせ、机に寄つて余念無く、手習を成さつて在らせられる。するとお側に政野と言うお侍女が控えて居ります。此政野は生れ附きが洵に色が黒うございませうから、若君は名をお呼びなさらず、犬の子を呼ぶ様にくろよくと仰せられます。其の政野が鶴千代丸様に打対い、政「ハ、ア若君様へ申上げます」若「オ、くろ、何んじや」政「若君様は斯うしてお溫和く、お手習のお稽古を遊ばして在らせられるとお宜しゆうございませう

るが、時々侍女部家へお遊びにお出でになつて悪戯をなされまして少しも憫みがございませぬが、貴君も些と菅公の事を御見習い遊ばせ」若「何、菅公の事を見習えとは……」政「菅原道真公御幼名吉祥丸と申してお歳お七才の時都西の洞院高辻御館の紅梅殿において、今日の様に大雪の降ましたる日に、お手習いを遊ばして居らせられた、其の時お傍に綾子と申す侍女が叡山風しの吹来る寒風も厭わずお守をして居りました」若「ウム、夫れが何うした」政「其の折吉祥丸様が洵に憫み深き、お歌を御詠み遊ばしました」若「何んと言う歌を道真が詠んだ」政「綾子と申す侍女がブル／＼震えて居る姿を御誦になつて、降る雪が綿々なれば手に溜めて

綾が袖にも入れたくぞ思ふ

と詠れました」若「ウム、左様か。何だ其様な事は予も詠ぞ」政「お詠遊ばしますか。何う言うお歌でございます」若「降る雪がじゃ……」政「真似をなされては不可ませぬ」若「真似じゃ無い黙ッて聞け。

降る雪が白粉なれば手に溶いて

おくろが面に塗りたくぞ思ふ」

政野は驚いて、政「アレ亦、其の様な事を御意遊ばします……」若「ヤツ、くろが怒つて赤くなつた、アハ、ッ」と、笑いに紛らしてお了いなされました。若君おい／＼御生長遊ばして早やお十一歳と成らせられた。此時にお侍女のお守役が代つて男子のお守役となる。其お守役に選ばれましたるは、沖周左衛門の倅周蔵と言ふ者に仰せ付けられた。そこで沖周蔵は、早速若君様のお傍に出る。処が此周蔵と言ふ者は、まだ歳は三十前後でございしまするに、病で抜けるのか頭の髪の毛がポツ／＼抜けて禿頭になつて居る。夫れを若君がお嫌い遊ばして、若「周蔵其の方の様な頭に毛の無い者は嫌じゃ。彼方へ行け／＼ッ」と、仰せられて何うしてもお傍にお置きなされませんから、沖周蔵は詮方無く其の座を下つて、大殿中納言頼房卿の御前に伺候して、周「ハ、ア申し上げます。不肖の拙者へ若君様のお守役を命ぜられし故に、只今御前に罷り出でましたる処、云々斯様／＼と仰せられて何うしてもお傍にお置き遊ばしませんによつて、何卒お守役は余人に仰せ附けられまする様願ひ奉つる」頼「ウム、それは然うで有ろうが、其の方の父周左衛門は子の幼年の頃守役を勤めて呉れた其の先例がある故に其の方に申し附けたのであるから、是非此役を勤めて呉れ」周「我君様の仰せには候得共、若君様には頭に毛の無い者は嫌じゃと御意

遊ばずに強て出ましては、却て御心に背けます……」頼「然らば斯様いたせ。其の方の頭に合様に鬘を拵え、夫れを禿た処へ附けて出て見よ」冲周蔵は此御誕を聞て心中大いに困りましたが、然し主の御命令は背かれませんかからして、周「ハ、ツ、仰せ畏み奉つります」と、お受けを申し上げて御前を下り、早速お出入りの町人に命じて鬘を調えさせ、其鬘頭に附けて、若君様の御傍へ出る。此容子を御覽遊ばしたる、御幼君鶴千代丸様は、若「オ、周蔵出たか」周「ハ、ツ」若「其方昨日迄は頭に鬘は無かつたが、今日は俄かに鬘が出来た喃」周「ハ、ツ、恐れ入ります……」此附鬘が若君の非常に御意に適いまして、若「周蔵来いよくッ」と、仰せられて至極お氣に入りとなり、何処へお出でになりまするにも冲周蔵をお供にお伴れなされます。其裡に若君おいゝ御生長遊ばして、御歳お十一歳とお成りなされた時、若「コレよ周蔵、其方お父上に申し上げて、予に長袴を穿して呉れよ」と、お言葉が下った。最とも上つ方では此長袴は十五歳以上にならねばお穿せになりません。何故かと申しまするに袴の裾が足に纏い付き進ても十一や二の御幼君では袴捌ぎが出来ません。よつて満十五歳にお成りなさらねばお穿せになりません。夫れに若君鶴千代丸様は、是非長袴を穿せよとの御意でございます。其処で冲周蔵は仕方なく、

此由中納言頼房卿へ言上に及びました。すると頼房卿は、頼「オ、左様か。夫れでは早速長袴を調進させて、鶴千代に穿して遣つて呉れよ」周「ハ、ッ、畏まり奉つる……」と、お次へ下つて早速水戸家お出入りの呉服屋を召出だし、お長袴の調進を申し附けて、直ぐ若君にお穿せ申し上げた。惣て子供と言ふものは、何んでも初めて見たる弄物は物珍らしくて、寝るにも放さず愛するものでございます。若君鶴千代丸様は、初めてお長袴をお穿き遊ばしたのがお嬉しいと見えて、若「周蔵来いよ」と、仰せられて御殿の内を彼方に此方と、ツ、くくくッとお歩行なさるを、お守役の沖周蔵は、少しもお傍を放れずお跡に付き従つて居る裡に、如何なる途端か誤つてお長袴の端を踏んだから堪ら無い。若君は前に倒つてドンとお仆れなされた。生憎敷居にて額を打つ、額は裂けて出血流れ出す。沖周蔵は、周「ア、失策た。御大切なる若君の御尊体にお負傷をさせて何んと申し訳けが有ろう。此上は我身に罪の来たるを待より外に思案は無い」と、決心の臍を堅めて居る。これが下賤の者の子供で有つたならば、誰れ彼れが負傷をさせたと泣いて親に告げ口をいたしますが、何んしろ後年天下の副將軍水戸三位中納言光圀卿と言ふ御名君に成らせられ、而して常盤神社と神に迄祀られ給う、聡明伶俐の御幼君鶴千代丸様でございます

から、決して周蔵の落度にはなさらん。若「コレ周蔵、何を心配して居るか。ハ、ア判つた今予が誤つて此置の縁に躓倒れ自身に負傷をいたせしを、其方の落度の様に思つて居るか。決して其方が予の長袴の裾を踏む理由は無い。何故なれば其方は向うむいて居るであろう」と、仰せられて周蔵の額の付け鬚を指に摘んで、ヒヨイと向うをむけてお了いなされた。沖周蔵は此御仁心なるお言葉を聞いて、只管有難涙に咽んで居る。然るに此事がお館中納言頼房卿のお聞きに達しましたので、頼「嗚呼鶴千代丸は、吾子乍らも実て天晴なる者で有る」とお喜び遊ばして在らせられる。又一家中の者は、此若君こそ今に天下の御名君に成らせられるお方で有る、何卒ぞ一日も早く御成人の上、お家御相続を遊ばさせられる様と、寄々御噂を申上げて居る内に、追々御成長遊ばさせられ、御年十六歳の時に、御元服の式を挙げられ、十八歳の御時、遂に御家御相続を遊ばさせられ、従三位中納言と御任官致され、天下の副將軍とお坐り成された。御簾中は京都近衛関白久忠公のお姫君をお迎え遊ばして芽出度御結婚の御儀式を挙げさせられた。然して其後、永く天下の副將軍をお勤め遊ばして在らせられる内に、若君御誕生ましく、御名を鶴千代丸と命け奉りました。此若君様が後に水戸家三代の御名君、中納言綱條卿と申上げ奉ります。扱水戸中納

言光圀卿は、御年六十歳の時に、中納言、副將軍の位を、若君綱條卿に御譲り遊ばし、其身はお氣に入りの御家来、直真影流の達人、佐々木助三郎、起倒流柔術の達人、渥美格之丞を始め、其他の御家来をお従え成されて、本国常陸国久慈郡西山に御別館を御建てに成り此処へ御隠居を遊ばしました。

◎光圀卿西山村へ御隠居

偕て水戸黄門光圀卿は、常州西山村に御隠居を成されし後は、月、雪、花を伴となし或いは和歌、誹諧、茶の湯、総て風流の道を楽しみとして、世を安楽に送つて居られます。尤も光圀卿は、西山村に御隠居を遊ばしたに仍て、西山侯とも申し上げます。又此御別館の周圍に一面梅林が有りましたに因つて、御俳名を梅里と申します。扱て御隠居の後、時折々御運動かたく、其界隈をお附の御家来を従えられ、御散歩にお廻りに相成ります。すると所々に農作をして居ります百姓が、御領主の御隠居様が、お通りに成ります。故に、○「ソレッ」と俄に頬冠り、鉢巻きを取り、鋤、鍬を投げ大地に跪付き、敬

礼を致して居ります。光圀卿は夫れを御覧遊ばし、光「ハ、ア領分の農民共が精を出して、農作をして居るわい」とニコ／＼お笑を含ませられ、其儘其処を御通行と成る。是れが只月に一二度位いお通りなさるのなら宜敷うございませるが、毎日／＼日に三度位い宛其界限の久慈村、塀垂村、馬場村なぞの村々をお廻りに成りますので、百姓共は大いに困つて仕舞い、彼方此方に三人五人集まつては、光圀卿の事を誇り始めた。太「ヤア五左衛門」五「オウ太郎作、何んだ」太「何うも困るぢやないか。是れが年に二度とか、月に一度とかの御領主様の御順檢なら宜いが、日に三度宛廻られた分には、吾々が堪ら無エ。御隠居様が御通行に成る時は、御附の御家来衆が、ソレツ冠り物を取れエの、敬礼をせよと仰しやる度毎に、鋤、鍬捨てゝお辞儀をせにやア成らない。是れでは農業の時間が何の位違うか判らない。と云うて御領主の御隠居が御通行なさるのを、止めると云う事もならない。何とか宜き方法は有るまいか」と皆口々に云い囃して居る其中に、馬場村の百姓作兵衛が、作「ヤア皆の衆の苦情を云うのも無理は無エ。ヨシ俺れが明日御通行に成つたら、一論判をして以來余り御通行に成らない様にして遣らう。万一御通行に成つてお附の御家来衆が、ソレ敬礼をしようの、冠り物を取れエと云つたつて、平氣の平左で農業をし

解説

加来耕三

(歴史家・作家)

「黄門」になれなかつた徳川光圀!?

立川文庫の人気秘訣に、主人公が諸国を漫遊するという物語、作劇術があげられる。

そして、ベストセラーとなった本作『水戸黄門 諸國漫遊記』(明治四十四年(一九一
一)初版刊行)こそが、その代表作であった。

ところが、種本と目される江戸の宝暦年間(一七五一―六四)に、成立したといわれる『水戸黄門仁徳録』(明治二十三年刊行・「水戸黄門記」として『近世実録全書』に所収)では、大いに虚構を加えた物語でありながら、肝心の「漫遊」は西山(現・茨城県常陸太田市)に隠居してからの微行(しのび歩き)＝物見遊山が、終わりの方にわずかに語られているだけであった。

解説

ご存じ、隠居した常陸国(現・茨城県)前水戸藩主の徳川光圀＝「水戸黄門」(本作で

は光圀 常陸国久慈郡西山村の百姓・光右衛門」と道中をとにもする、助さん、格さんも『水戸黄門仁徳録』には出てこなく。

諸国を主従が“漫遊”しながら、悪代官や村の不心得者を懲らしめ、退治する物語は、幕末期、講釈師の桃林亭東玉が、十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』にヒントを得て、創作した『水戸黄門漫遊記』を待たねばならなかった。

悪人どもがいかに抵抗しても、最後には黄門さまの鶴の一声、

「余は天下の副將軍・水戸黄門なるぞ」

この声を聞かされてはたまらない。悪人たちは、「へへっ」と恐れ入ってしまった。

その後、多くの人々が想像力を付加させて、幾つもの作品を創ったが、やはり最高傑作は加藤玉秀（三代目・玉田玉秀齋）の講述による本書であろう。

ちなみに、読者の多くに印象として深く刻まれているかと思われる、黄門さまの名場面——最後に正体を明かす場面で、お供の助さん、格さんが“三つ葉葵”の印籠を掲げて、主人の正体を明かすようになったのは、実のところ昭和四十年代（一九六五〜七四）に入っている、テレビの時代劇からである。

水戸黄門 [立川文庫セレクション]

2019年6月10日 初版第1刷印刷

2019年6月20日 初版第1刷発行

著 者 加藤玉秀

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1819-1 2019 Kato Gyokushu, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。